

# 大学生の国内・海外への旅行意図と観光動機および 新型コロナウイルス感染症に対する感染リスク認知との関連

田口 雅徳

The relationship among students' travel intention, their motives for sightseeing and perceived risk of COVID-19 infection.

TAGUCHI Masanori

The present study aimed to examine the relationship among students' travel intention, their motives for sightseeing and perceived risk of COVID-19 infection. The participants were 106 undergraduates who answered a questionnaire concerning their intention of domestic and overseas travel, their motives for sightseeing and perceived risk of COVID-19 infection. The main results were as follows: (1) The students' intention of overseas travel was significantly correlated with their motives for sightseeing such as "stimulation" and "experiencing nature"; (2) The students' intention of overseas travel also tended to correlate with a factor of "interaction with people" among motives for sightseeing and with perceived risk of COVID-19 infection; (3) The students' intention of domestic travel showed no significant correlation with their motives for sightseeing and perceived risk of COVID-19 infection.

## 1. 問題と目的

2020年1月に日本国内で初めて新型コロナウイルス感染症（以下、COVID-19）が確認され（厚労省、2020）、それ以降、感染が急拡大する“感染の波”をたびたび経験することとなった。2022年11月の時点で日本国内での累積感染者数は2300万人超となっている（厚労省、2022）。

COVID-19の感染拡大を受け、日本では2020年4月に第1回の緊急事態宣言が発令され、不要不急の外出自粛など感染防止策への協力が国民に要請された

(内閣官房, 2020)。大学等の教育機関では対面形式の授業を取りやめ、遠隔(オンライン)授業をおこなうなどの対策が取られることとなり、また、飲食店などでは休業や営業時間の短縮などを余儀なくされた。このような強い行動制限を伴う感染防止策は、世界各国で敢行された(中島, 2021)。

こうした感染拡大防止のための行動制限は、社会・経済活動に多大な影響を与え、失業率の急激な上昇や世界規模での経済成長率の落ち込みを招いたとされる(たとえば、経産省, 2020)。とくに、観光業に対する需要は激減し、経済的損失は甚大であったと指摘されている(宮内・阿部, 2021)。

令和3年版の観光白書(観光庁, 2021)によると、2020年の国内における日本人の宿泊旅行者数は前年比48.4%減、国内の日帰り旅行者数は前年比51.8%減となり、宿泊旅行と日帰り旅行ともに大きく減少したとされる。2021年になっても状況に変化はなく、2021年の国内宿泊旅行者数は2019年度比で54.5%減、国内の日帰り旅行者数は同54.1%減となり、国内旅行者の減少傾向は継続した(観光庁, 2022)。

世界全体でも、国際観光客数は大幅に減少したとされる。たとえば、国連世界観光機関の発表では(UNWTO, 2021)、2020年における世界全体の国際観光客数は2019年より約74%(およそ10億人)も減少したという。2010年以降、国際観光客数は10年連続で増加していたとされるが、この度のCOVID-19の感染拡大にともない大きく減少することとなった(観光庁, 2021)。

こうした状況から、COVID-19の感染拡大による観光産業への影響や観光行動等に対する影響を検証する研究が各国で実施されている(たとえば、Rahman, Gazi, Bhuiyan & Rahaman, 2021; Škare, Soriano & Porada-Rochoń, 2021; Yang, Zhang & Rickly, 2021)。わが国でも、たとえば、JTB総合研究所が、COVID-19の世界的流行が始まった2020年2月から旅行消費等に関する意識調査を継続的に実施している。同研究所の2022年8月の報告書によれば、今後1年間に国内旅行を実施する意向があるものは41.1%、海外旅行を実施する意向のあるものは11.1%であったという(JTB総合研究所, 2022)。コロナ禍以前では国内旅行の実施意向は6割程度であったとされており、それと比較すると上述の国内旅行の実施意向の割合は依然として落ち込んでいるといえる。ただし、国内旅行、海外旅行とも実施意向の割合は世代による違いがみられ、男女とも20代の若者世代で旅行の実施意向が高いとされる。この世代の国内旅行の実施意向は5割超、海外旅行の実施意向は2割超であった(JTB総合研究所, 2022)。若者層では国内旅行、海外旅行の実施意向が比較的高いことがうかがわれる。

こうした旅行に出かけようとする意図には、どのような要因が影響しているのだろうか？国枝（2021）は国内旅行に対する行動意図にどのような要因が影響しているのかについてTPB（The Theory of Planned Behavior）を踏まえて検証している。その結果、国内旅行に対する行動意図には、“主観的規範（旅行に出かけることを家族など周囲の人が許容してくれるという信念）”や“知覚された行動制御（旅行に行く機会や時間は十分にあるなどという知覚）”、また旅行に伴う“感情（旅行に行くのはワクワクするといったポジティブ感情や、旅行に行けないことへの不満などのネガティブ感情）”に強く影響を受けることが示唆されたとしている。

つぎに、中村（2021）は、コロナ禍において早期に海外旅行にでかける意向が強い人の特徴を検討した。その結果、海外旅行を早期に実施しようとする意向が強い者は、海外旅行に伴うリスクの知覚が低く、また周囲の期待に従って旅行を回避するといった主観的規範も低いことが明らかにされた。こうした結果を踏まえ、中村（2021）は、海外旅行の早期実施意向が高い者では、渡航先の感染状況をあまり考慮していないことがうかがわれると指摘している。

中村（2021）と同様に、ほかのいくつかの研究でも、コロナ禍において旅行を実施しようとするかどうかは、COVID-19に対する感染リスクの認知に影響されることが指摘されている。たとえば、古屋（2021）は、COVID-19流行下における国内旅行の実施や目的地の選択において重視される要因を検証した。その結果、旅行の実施意向は経済的要因や時間的余裕などの要因よりも、COVID-19の罹患の可能性や社会的状況などの要因が強く関与していたと述べている。また、河内（2021）は、コロナ禍での大学生の観光意欲や観光行動を検証しており、その結果、大学生において観光意欲が湧かない第1の理由は、「COVID-19に感染する可能性がある」からだとしている。以上の研究知見を踏まえると、国内・海外への旅行意図には、COVID-19に対する感染リスクの認知が影響している可能性が考えられる。

ところで、安原・五木田（2021）はCOVID-19の感染拡大に伴い、感染リスクを回避できる旅行タイプとして自然観光への関心が高まっていると指摘している。実際、COVID-19の流行により、“関心ある観光の要素”として「自然・景勝」が最も多く挙げられるようになったとする研究知見もみられる（たとえば、河内、2021）。COVID-19の感染拡大を受けて、人々が国内や海外への観光旅行に求めるものが変化している可能性が考えられよう。

観光旅行に何を求めるのかといった“観光動機”に関して、林・藤原（2008）

は日本人海外旅行者を対象として調査をおこない、観光動機が刺激性・文化見聞・現地交流・健康回復・自然体験・意外性・自己拡大の7因子から構成されることを明らかにしている。さらに、こうした観光動機が旅行の訪問地域や旅行形態（個人旅行と主催旅行）により変化することを示した。

栗栖・齊藤・荒巻・花木（2017）は、観光動機と離島を訪れる意図との関連を検証しており、その結果、観光動機のうちでも「健康回復」や「文化見聞」が離島への訪問意図に関与していることを報告している。さらに、中村・西村・高井（2016）も、若者の海外旅行への動機づけの高さが行動意図に与える影響を検討した。その結果、「日本とは違う環境で新しい経験を積みたい」などの海外旅行への動機づけが海外旅行に出かける意図に影響することを明らかにしている。このように、先行研究の結果からは観光動機が国内・海外への旅行意図に関連することが示唆される。

以上のように、COVID-19の流行下において国内および海外に観光旅行に出かけようとする旅行意図には、COVID-19に対する感染リスク認知や、“何を求めてその観光旅行に出かけるのか”といった観光動機が関与していることが推察される。そこで、本研究では、大学生を対象として、国内・海外への旅行意図と観光動機および COVID-19に対する感染リスク認知との関連を検討することを目的とした。

## 2. 方法

①調査協力者 本研究に参加してくれたのは、首都圏内の大学に通う学生111名であった。このうち、回答に記入漏れがなかった106名（男性36名、女性67名、性別回答なし3名）のデータを分析対象とした。また、年齢構成は18歳が7名、19歳が51名、20歳が34名、21歳が9名、22歳が4名、25歳以上が1名となっていた。

②調査手続きと質問項目 調査は2022年6月から8月にかけてオンライン形式で実施した。具体的には、Google フォームを用いて質問項目および回答用の評価項目を設定し、作成した Google フォームの URL を調査協力者に送信して回答を依頼した。調査に先立って、調査内容に関する概要を簡単に文章で説明し、調査への協力が得られた調査協力者に対してのみ回答を求めた。

質問項目は、まず調査対象者の性別や年齢などを尋ねるフェイスシート、および、国内および海外への旅行意図を測定するための尺度、旅行に出かける動機を調べるための尺度、さらに COVID-19の感染リスクに対する認知を測るた

めの尺度から構成されていた。

上記の尺度のうち、まず国内および海外への旅行意図を測定するための尺度として、金（2011）などを参考にそれぞれ1項目を作成した。調査時期が2022年度夏季休暇期間の前であったことから、例えば、国内の旅行意図に関する質問項目は「この夏、国内の観光旅行に出かけたいとおもいますか？」とした。回答は「全くそう思わない」から「とてもそう思う」までの5件法とし、評定に基づいてそれぞれ1点から5点と得点化した。

つぎに、観光動機を測定するための尺度としては、林・藤原（2008）や松永・井手（2019）において使用された項目を参考に、一部修正して使用することとした。林・藤原（2008）は先述したように日本人海外旅行者の観光動機を測定するための尺度を開発しており、さらに、この尺度を林・藤原（2012）や松永・井手（2019）は一部修正することで日本の国内旅行者の観光動機を測定するための尺度として使用している。そこで、これらの先行研究で使用された質問項目を一部変更し、国内および海外の観光動機を測定するための尺度として使用した。質問項目は全部で30項目あり、「1. 全くあてはまらない」から「5. とてもよくあてはまる」までの5件法で回答を求めた。また、評定結果に基づいてそれぞれ1点から5点として得点化をおこなった。

また、COVID-19の感染リスクに対する認知については、樋口・荒井・伊藤・中村・甲斐（2021）において使用された“新型コロナウイルス感染症の罹患リスク等の認知”を測定する尺度を用いることとした。この尺度は、「新型コロナウイルスへの感染が不安だ」、「誰も新型コロナウイルス感染症に感染する危険がある」、「新型コロナウイルスを広めてしまうことが怖い」など10項目から構成されていた。樋口ら（2021）では各設問に「全くそう思わない」から「非常にそう思う」までの7件法で回答を求めているが、本研究では観光動機尺度の評定と同じく、「1. 全くそう思わない」から「5. とてもそう思う」までの5件法で回答を求めた。また、評定結果に基づいてそれぞれ1点から5点として得点化をおこなった。

③倫理的配慮 調査を実施するにあたり、調査協力者には調査の概要を説明した。そして、調査への参加は任意であって、調査に参加しなくてもそれにより不利益を被ることはないことを説明した。また、たとえ調査に参加しても、回答の途中で調査への参加を中止できることなども補足した。さらに、調査は無記名式であるため個人が特定されることはないことや、収集したデータは研究目的以外に使用しないことなども明示して説明した。文章にて以上の説明をし

た後、調査協力への同意が得られた者に対してのみ回答を求めた。

3. 結果

3.1. 各尺度の因子分析結果

本研究では林・藤原（2008）や松永・井手（2019）などが作成した観光動機尺度を参考にして、大学生が国内および海外に観光旅行にでかける動機を調べるための尺度を作成した。そこで、本研究で作成した観光動機尺度が、先行研究と同様の因子構造を示すのかを確認するため、主因子法 promax 回転による因子分析をおこなった。固有値 1 以上を基準としたところ 8 因子が得られた。ただし、先行研究と同じようには項目は分かれず、いずれの因子に対しても因子負荷量が .400未満と低い項目がみられた。また、1つの項目が複数の因子に対して高い負荷量を示す場合もあった。そこで、これらの項目を削除して、再度、因子分析を実施したところ、7 因子で解釈可能な結果を得た（Table1）。

Table1 観光動機尺度の因子分析結果

項 目	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	第5因子	第6因子	第7因子
	現地交流	刺激性	健康回復	意外性	自己革新	自然体験	文化見聞 共通性
他の地からやってきた観光客たちと仲良くなりたい	<b>.909</b>	-.097	-.005	.022	.008	-.089	-.058
旅先の人たちと仲良くなりたい	<b>.839</b>	.018	.062	-.038	-.050	.120	-.005
旅先では、地元の人たちと話したい	<b>.828</b>	.175	-.061	.033	-.127	-.019	-.061
旅先の人たちの暮らしぶりにふれたい	<b>.622</b>	-.065	.016	-.145	.368	-.069	.085
旅先では、目新しくて変化に富んだことをしてみたい	.063	<b>.844</b>	-.058	-.034	-.007	-.153	.040
日常生活では触れない文化や風習に触れたい	-.025	<b>.785</b>	-.037	-.114	-.042	.128	.120
日常とは違う環境で新しい経験をしてみたい	.215	<b>.614</b>	-.023	.124	-.084	.038	-.113
同じ環境ばかりだと退屈なので、観光旅行に行きたい	-.223	<b>.558</b>	.087	-.120	.144	.123	.042
旅先では、ドキドキするような興奮を感じたい	.192	<b>.419</b>	.172	.213	.081	-.057	-.146
日頃の生活で疲れた心身を癒したい	.022	.144	<b>.782</b>	-.019	-.012	-.080	.004
日頃の生活でたまったストレスを解消したい	.133	-.203	<b>.678</b>	-.003	-.111	.170	.019
日頃の生活を忘れて、思いきり羽を伸ばしたい	-.190	.067	<b>.590</b>	.058	.250	-.078	.016
旅先では、はっきりした目的地を決めず、流れに身を任せたい	.074	-.145	.027	<b>.741</b>	.038	.127	.104
行き当たりばったりの旅行がしたい	-.037	.127	-.050	<b>.721</b>	.031	.103	.132
しっかりと日程や計画を立てて観光旅行をしたい	.082	.087	-.054	<b>-.595</b>	.282	.142	-.057
観光旅行をすることで、決まりきった生活から抜け出したい	-.100	.029	.085	-.111	<b>.773</b>	-.024	-.026
いつもの自分とは違った新たな一面を発見したい	.258	.012	-.117	.008	<b>.708</b>	-.003	-.028
自分自身を見つめなおしたい	.238	-.050	.040	.137	<b>.498</b>	.106	-.007
スケールの大きな自然を体感したい	.062	-.012	.082	-.038	-.087	<b>.952</b>	-.072
野山を散策して、身近に自然を感じたい	-.153	.071	-.109	.240	.154	<b>.618</b>	-.035
その地の芸能（音楽・演劇・踊り）を見聞きたい	.073	.080	.038	-.047	-.114	.066	<b>.877</b>
美術館や博物館で芸術品を見てまわりたい	-.034	-.012	-.005	.243	.056	-.184	<b>.616</b>
寄与率 (%)	28.5	9.4	6.5	5.7	4.4	3.2	3.2
α 係数	.89	.81	.71	.77	.67	.74	.68



第1因子は、「他の地からやって来た観光客たちと仲良くなりたい」や「旅先の人たちと仲良くなりたい」などの項目から構成されており、先行研究では“現地交流”因子とされていることから、本研究でも“現地交流”因子とした。第2因子は「旅先では、目新しく変化に富んだことをしてみたい」や「日常生活では触れない文化や風習に触れたい」などの項目から構成されており、先行研究と同じように、“刺激性”因子とした。第3因子は「日頃の生活で疲れた心身を癒したい」や「日頃の生活でたまったストレスを解消したい」などの項目で構成されており、先行研究において“健康回復”因子とされている。そこで、本研究でもこの因子を“健康回復”因子とした。第4因子は「旅先では、はっきりした目的地を決めず、流れに身を任せたい」や「行き当たりばったりの旅行がしたい」などの項目から構成されており、先行研究にならって“意外性”因子とした。第5因子は「観光旅行をすることで、決まりきった生活から抜け出したい」、「いつもの自分とは違った新たな一面を発見したい」、「自分自身を見つめなおしたい」の3項目から構成されていた。このうち、「観光旅行をすることで、決まりきった生活から抜け出したい」の項目は林・藤原（2008）や林・藤原（2012）では“刺激性”因子に含まれる項目であり、いっぽう、「いつもの自分とは違った新たな一面を発見したい」と「自分自身を見つめなおしたい」の2項目は林・藤原（2008）などでは“自己拡大”因子に含まれる項目であった。これら3項目は、観光旅行を通して「決まりきった生活から抜け出し」、自己の「新たな一面を発見」しようとする態度に関わる項目といえる。そこで、この因子を“自己革新”因子と命名した。第6因子は「スケールの大きな自然を体感したい」と「野山を散策して、身近に自然を感じたい」の2項目で構成されており、これらの項目は先行研究において“自然体験”因子を構成している項目であった。そこで、本研究でも“自然体験”因子とした。第7因子は「その地の芸能（音楽・演劇・踊り）を見聞きたい」や「美術館や博物館で芸術品を見てまわりたい」の2項目で構成されており、先行研究にならって“文化見聞”因子とした。

各因子ともCronbachの $\alpha$ 係数を算出したところ、Table1にみられるように、どの因子の $\alpha$ 係数もおおむね満足できる数値となった。そこで、各因子とも内的整合性を備えているものと判断し、その後の分析にはこれら7つの因子の得点を用いることとした。各因子の得点は、各因子に含まれる項目の評定点を加算し（逆転項目は数値を逆転させて加算）、因子に含まれる項目数で除した数値を用いることとした。

つぎに、COVID-19に対する感染リスク認知に関する尺度についても因子構造を分析するため主因子法 promax 回転による因子分析をおこなった。固有値が1以上の因子は3因子が抽出されたが、いずれの因子にも因子負荷量が.400未満と低い項目がみられた。そこで、これらの項目を削除し、因子分析をおこなった結果、最終的に2因子で解釈可能な結果を得た (Table2)。

Table2 感染リスク認知尺度の因子分析結果

項 目	第1因子	第2因子	共通性
	感染拡散リスク	罹患リスク	
新型コロナウイルスを広めてしまうことが怖い	.921	.088	.96
新型コロナウイルスを広めてしまうのではないかと不安だ	.912	.015	.85
自分も新型コロナウイルスを誰かに感染させてしまう	.692	.066	.43
新型コロナウイルスへの感染が怖い	-.015	.962	.91
新型コロナウイルスへの感染が不安だ	.008	.950	.91
寄与率 (%)	66.8	14.4	
α 係数	.95	.88	

第1因子は「新型コロナウイルスを広めてしまうことが怖い」、「新型コロナウイルスを広めてしまうのではないかと不安だ」など3項目から構成されており、質問項目の内容から「感染拡散リスク認知」因子とした。第2因子は「新型コロナウイルスへの感染が怖い」および「新型コロナウイルスへの感染が不安だ」の2項目から構成されており、「罹患リスク認知」因子とした。これら2因子について Cronbach の  $\alpha$  係数を算出した。その結果、第1因子では  $\alpha = .95$ 、第2因子では  $\alpha = .88$  となり、どちらの因子の  $\alpha$  係数も比較的高い数値となった。各因子とも内的整合性を備えているものと判断し、その後の分析には、これら2つの因子の得点を用いることとした。各因子の得点は、各因子に含まれる項目の評定点を加算し、因子に含まれる項目数で除した数値を用いることとした。

3. 2. 国内・海外への旅行意図と観光動機および感染リスク認知との関連

本研究では大学生の国内・海外への旅行意図と観光動機および COVID-19に対する感染リスク認知との関連を検討することを目的とした。そこで、国内・海外への旅行意図に関する質問項目の得点と観光動機尺度および COVID-19に対する感染リスク認知尺度の各因子得点との相関を求めた。結果は Table3に示す通りであった。



Table3 各変数間の相関係数 ( $^{\dagger}p<.10$ ,  $^*p<.05$ ,  $^{**}p<.01$ )

変数名	現地交流	刺激性	健康回復	意外性	自己革新性	自然体験	文化見聞	感染拡散リスク	罹患リスク
国内旅行意図	-.04	.07	.05	.08	.00	.05	.13	.06	-.05
海外旅行意図	.18 <sup>†</sup>	.28 <sup>**</sup>	.16	.09	.10	.19 <sup>*</sup>	.08	-.16	-.18 <sup>†</sup>

Table3をみるとわかるように、国内旅行に対する意図と観光動機の各因子および感染リスク認知の各因子との間には有意な相関はみられなかった。したがって、大学生においては、国内の観光旅行に出かけようとする意図は、本研究で扱った7つの観光動機の因子とは関連がないことが示された。それと同時に、COVID-19に対する感染リスク認知とも、国内への観光旅行意図とは関連がないことが明らかとなった。

いっぽう、海外への旅行意図は、観光動機のうち“刺激性”および“自然体験”の各因子と有意な相関がみられた。また、観光動機のうち“現地交流”因子およびCOVID-19に対する感染リスク認知のうち“罹患リスク認知”因子は、海外への旅行意図との相関が有意傾向であった。海外に観光旅行に出かけようとする意図が高い学生ほど、海外旅行に対して刺激性や自然体験を求めており、また旅行先での人的交流を求める傾向があることが示された。さらに、海外に観光旅行に出かけようと意図する学生では、COVID-19に対する罹患リスク認知が低い傾向にあることも示唆された。

#### 4. 考察

本研究では国内・海外への旅行意図と観光動機およびCOVID-19に対する感染リスク認知との関連を検討することを目的とした。そこで、まず観光動機およびCOVID-19に対する感染リスク認知に関する項目について、それぞれ因子分析をおこなった。その結果、観光動機尺度については7因子、またCOVID-19に対する感染リスク認知尺度については2因子が得られた。これらの因子と国内への旅行意図、および、海外への旅行意図との関連を検討するため相関係数を算出した。その結果、国内の観光旅行意図と観光動機に関する7因子およびCOVID-19に対する感染リスク認知に関する2因子との間には有意な相関はみられなかった。いっぽう、海外への旅行意図は、観光動機のうち“刺激性”および“自然体験”の各因子と有意な相関がみられ、さらに観光動機のうち“現地交流”因子およびCOVID-19に対する感染リスク認知のうち“罹患リスク認知”因子とは相関が有意傾向となることが示された。

これらの結果から、とくに海外に観光旅行に出かけようとする意図が高い学

生ほど、海外旅行に対して“刺激性”や“自然体験”を求めている、また旅行先での人的交流を求める傾向があることがわかった。また、海外への旅行意図が高い学生ほど、COVID-19に対する罹患リスク認知が低い傾向にあることもわかった。

COVID-19に対する罹患リスク認知が海外への旅行意図と関連するという結果は、中村（2021）など先行研究の知見とも一致していたといえる。海外への旅行意図が高い学生では、それほどCOVID-19に罹患することを恐れたり、不安に感じたりしていないことがうかがわれた。中村（2021）が指摘するように、海外への旅行意図が高い学生は、渡航先におけるCOVID-19の感染状況などをあまり考慮しないことが推察されよう。

つぎに、海外への旅行意図と観光動機との関連を検討したところ、海外への旅行意図が比較的高い学生では、観光動機のうちでも“刺激性”や“自然体験”、“現地交流”を重視していることが示唆された。コロナ禍以降、自然を求めて旅行にでかける日本人が増加しているとの指摘がみられるが（たとえば、安原・五木，2021）、本研究結果でも、海外旅行へ出かける意向が高い学生では、自然を体感できたり、自然を身近に感じられたりする旅行を求める傾向にあることが示唆されたといえる。

さらに、海外への旅行意図が高い学生は、「目新しく変化に富んだことをしてみたい」や「日常生活では触れない文化や風習に触れたい」など日常生活では触れられないような新奇な経験や、それに伴う興奮や驚きなどを求めていることがわかった。また、「他の地からやってきた観光客たちと仲良くなりしたい」や「旅先の人たちと仲良くなりしたい」など、旅行先での人と人との交流を求める傾向がみられることも示唆された。

コロナ禍では外出自粛など強い行動制限を伴う生活が続いてきた。外部の世界から遮断され、閉塞的な生活を強いられたともいえる。海外への旅行意図が高い学生では、コロナ禍において経験できなかった新奇な体験や文化的背景の異なる人たちとの対面での交流を求めていることが推察される。

ところで、本研究では国内への旅行意図と、観光動機およびCOVID-19に対する感染リスク認知との間には有意な相関がみられなかった。本研究で収集したデータからは、この点に関する理由は判然としなかった。また、海外への旅行意図と観光動機およびCOVID-19に対する感染リスク認知との関連に関しても、相関係数は有意ではあったが、比較的低い数値にとどまったといえる。コロナ禍における大学生の国内・海外への旅行意図にどのような要因が関与して

いるのかについては、本研究結果を踏まえて調査内容を精査し、再度検証して  
みる必要がある。この点が今後の課題として残されたといえる。

## 引用文献

- 古屋秀樹 (2021) 潜在クラス分析を用いた COVID-19 流行下での旅行意向分析 土木学会論文  
集 D3 (土木計画学), 77(2), 141-150.
- 林幸史・藤原武弘 (2008) 訪問地域、旅行形態、年令別にみた日本人海外旅行者の観光動機  
実験社会心理学研究, 48(1), 17-31.
- 林幸史・藤原武弘 (2012) 観光地での経験評価が旅行満足に与える影響：観光動機と旅行経  
験の観点から 社会学部紀要, 114, 199-212.
- 樋口匡貴・荒井弘和・伊藤拓・中村葉々子・甲斐裕子 (2021) 新型コロナウイルス感染症緊  
急事態宣言期間における予防行動の関連要因：東京都在住者を対象とした検討. 日本公  
衆衛生雑誌, 68(9), 597-607.
- JTB総合研究所 (2022) 新型コロナウイルス感染拡大による、暮らしや心の変化および旅行  
再開に向けての意識調査 (2022年8月)：第7波の中での生活者の意識とこれからの旅  
行 (<https://www.tourism.jp/wp/wp-content/uploads/2022/08/covid19-tourism-202208-report.pdf> 2022年12月8日参照)
- 観光庁 (2021) 令和3年版観光白書 (<https://www.mlit.go.jp/statistics/content/001408959.pdf>  
2022年11月13日参照)
- 観光庁 (2022) 令和4年版観光白書 (<https://www.mlit.go.jp/statistics/content/001512919.pdf>  
2022年11月13日参照)
- 河内良彰 (2021) 新型コロナウイルス感染症の蔓延下における大学生の旅行意欲と観光行動  
に関する調査研究 社会学部論集, 72, 21-40.
- 経済産業省 (2020) 新型コロナウイルスの影響を踏まえた経済産業政策の在り方について  
([https://empowerment.tsuda.ac.jp/storage/chart\\_url\\_image/53382.pdf](https://empowerment.tsuda.ac.jp/storage/chart_url_image/53382.pdf) 2022年11月13  
日参照)
- 金春姫 (2011) 日本の若者はなぜ海外旅行に行かないのか：東アジアにおける地域間比較を  
ととして 成城大学経済研究, 192, 89-104.
- 厚生労働省 (2020) 新型コロナウイルスに関連した肺炎の患者の発生について (1例目)  
([https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage\\_08906.html](https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage_08906.html) 2022年11月13日参照)
- 厚生労働省 (2022) 新型コロナウイルスの発生状況 2022年11月13日掲載分 ([https://  
www.mhlw.go.jp/content/10906000/001012073.pdf](https://www.mhlw.go.jp/content/10906000/001012073.pdf) 2022年11月13日参照)
- 国枝よしみ (2021) 消費者の観光行動に及ぼす COVID-19の影響－今後の地域観光の可能性  
を探る サービンロジー, 7(2), 63-73.
- 栗栖聖・齊藤修・荒巻俊也・花木啓祐 (2017) 自然および旅行に対する態度が島への訪問意  
図に与える影響構造分析：八丈島を例に 環境科学会誌, 30(5), 307-324.
- 松永佳澄・井手拓郎 (2019) 歴史文化観光を目的とする日本人国内観光者の観光動機 観光研  
究, 30(2), 53-58.
- 宮内太郎・阿部直也 (2021) 新型コロナウイルスによる観光業の最終需要減少に基づく経済

影響の推定 環境情報科学論文集, 35, 215-220.

内閣官房 (2020) 新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言の実施状況に関する報告 ([https://corona.go.jp/news/pdf/kinkyujitaisengen\\_houkoku0604.pdf](https://corona.go.jp/news/pdf/kinkyujitaisengen_houkoku0604.pdf) 2022年11月17日参照)

中島一敏 (2021) 世界の COVID-19 の流行と対策の歩みと今後の見通し 日本内科学会雑誌, 110(11), 2348-2354.

中村哲 (2021) 新型コロナウイルス感染症影響後の日本人の海外旅行実施意向 玉川大学観光学部紀要, 9, 43-61.

中村哲・西村幸子・高井典子 (2016) 日本人の海外旅行の一般的意思決定に関するモデル 玉川大学観光学部紀要, 4, 1-19.

Rahman, M. K., Gazi, M. A. I., Bhuiyan, M. A., & Rahaman, M. A. (2021) Effect of COVID-19 pandemic on tourist travel risk and management perceptions. *Plos one*, 16 (9), e0256486.

Škare, M., Soriano, D. R., & Porada-Rochoń, M. (2021) Impact of COVID-19 on the travel and tourism industry. *Technological Forecasting and Social Change*, 163, 120469.

UNWTO (2021) UNWTO World Tourism Barometer and Statistical Annex, January 2021. *UNWTO World Tourism Barometer (English version)*, 19(1), 1-42.

Yang, Y., Zhang, C. X., & Rickly, J. M. (2021) A review of early COVID-19 research in tourism: Launching the Annals of Tourism Research's Curated Collection on coronavirus and tourism. *Annals of Tourism Research*, 91, 103313.

安原有紗・五木田玲子 (2021) コロナ禍で自然観光を志向する日本人旅行者の特性に関する基礎的考察 第132回日本森林学会大会学術講演集, 42.